



かがやき

るくる
がばしえ
んがさた
かかやき

鳴鼓小学校
立町津時
よりだ学校 第17号

令和5年3月24日
文責：校長 今井大輔

第41回卒業証書授与式

3月16日(木)に第41回卒業証書授与式を挙行了しました。6年生児童とその保護者の皆さんにとって、小学校生活最後で、更に最大の行事となります。入学時からの6年間の成長を実感し、感動できるイベントです。いつも子供たちや保護者の皆さんにとって最高の日となるようにと思ひながら迎えています。

校長式辞

(前略)
今年度は、三年ぶりに再スタートしたことが多くありました。有観客の運動会や県外への修学旅行、水泳の学習などです。その再スタートの度に六年生のみなさんの輝く姿がありました。運動会では、観客を前にして全力疾走をし、応援合戦やソーラン節で生き生きと表現するみなさんから、観ている私たちは元気をもらいました。三年ぶりの県外への修学旅行は熊本方面でした。六年生の礼儀正しい行いの足跡のおかげで、次年度訪れる時にはきっと訪問先の方が、今の五年生をあたたく歓迎してくれることでしょう。

修学旅行後には、鳴鼓小の新たな取組も始めましたね。朝のボランティア活動です。鳴鼓坂の落ち葉を一心に集める姿、砂がたぐさん上がついている児童玄関をきれいに掃く姿。埃のたまった階段をきれいにする姿。自主的に動く姿は、下級生から輝いて見えました。この朝のボランティア活動は、新たな伝統の始まりです。あなたたちが動き出し、下級生へ引き継がれていく伝統となることでしょう。本当にありがとうとさせていただきます。

自分のがんばりが、他の人を元気にする。自分を律した行いが、信頼をつくる。自分の挑戦が、新しい伝統を創る。これらを体現した六年生でした。

さて、昨年流行した「新時代」という曲があります。皆さんがこれから生きていく新時代は、いや、もう始まっているこの新時代は予測困難な時代と言われています。

例にあげるとすれば、新型コロナウイルス感染症拡大もその一つです。「コロナと共に生きる生活スタイルは誰も予測できなかったこと」です。また、AIの急速な進歩で、今ある職業の半分は無くなるのではないかと言われています。この新時代を生き抜いていかななくてはいけない皆さんです。そこで、私が考える生き抜くためのヒントを一つ出したいと思ひます。

算数の問題です。「 $10 \div 4$ はいくらですか?」(途中略)
算数の問題としては、「2あまり2」「2.5」などが正解です。しかし、実際の生活の中では、この子の家庭のようにあまりが出ない場合があります。私は、この子の答えの中に家庭の温かさを感じました。

「 $10 \div 4 = 2$ あまり2」「 $11 \div 4 = 2$ あまり3」などは、正しい答えです。では、「家族みんなで分け」と話した子の答えは「間違えた答え」でしょうか。私は、そうは思いません。この子の答えは「優しい答え」状況にあった答えだと思ひます。(途中略)

「一人に優しい」「二物に優しい」「地球に優しい」そんな優しい答えが、特に人と人の間には必要です。そして、「家族の状況」周りの状況「時代の状況」を考えた答えが、新時代には必要です。そうです。計算機やAIでは出せない「優しい答え」状況にあった答えを出す力こそが新時代を生き抜くには必要とされています。

さて、卒業生の皆さん。どうでしょう。新時代を生きていくヒントは見つかりましたか。先に話したように「他の人を元気にする」「自分を律する」「新たなことに挑戦する」「心ができた皆さんです。どんな荒波が来ても、きつくと大丈夫です。この鳴鼓小学校で学んだことを生かし、そして、鳴鼓小学校の卒業生であることを誇りに進んでください。新時代は開けられます。

(最後略)

送辞と答辞

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、卒業式のスタイルも変わりました。来賓参加人数の縮小や告辞・祝辞の書面化、全校による呼びかけから代表児童の送辞・答辞への変更などです。それにより、卒業式に係る時間は、以前の半分、3分の2程度に縮まりました。当日に開くことだけではありませぬ。卒業式にかける練習時間も大幅に短くなり、その分、学習や卒業に向けての活動にあてることのできるようになりました。

以前行っていた全校児童による「呼びかけ」にも、今回のような「送辞・答辞」にもそれぞれの良さがあります。いずれにしても、子供たちの思いが込められており、感動するものです。今年度の式歌、5年生の「スタートライン」と卒業生の「旅立ちの日」のどちらにも、聴いている人の心に響きわたりました。

在校生代表5年生の送辞は、1組の浜崎基さん、2組の小谷夏凜さんと、卒業生へのあこがれやこれまでの功績を中心に堂々と述べました。

卒業生代表の答辞は、1組の眞武高弘さん、2組の瀧上美羽さんでした。これまでの思い出と家族への感謝、在校生への願いなど、思いの詰まった内容でした。送辞・答辞共に、代表者のみで考えたものではなく、5年生、卒業生から思いを込めて完成させたものです。だからこそ、そこにいる5年生にも卒業生にも響くものとなったことでしょう。



しげやき

鳴鼓小での1年が終わろうとしている。新補校長として先生方や地域の皆さんに助けられることが多く、感謝の気持ちでいっぱいである。この1年の間常に、鳴鼓っ子を成長させているのだから、先生方の教師力を高めているのだからかという自問自答の日々であった。そんな中、今年度は、スポーツから活力をもらうことが多くあった。大変盛り上がったWBCの開催中に、日本人選手の善行がメディアで度々取り上げられた。大谷選手ファン・選手への神対応や自然にゴミを拾う姿は、有名である。加えて佐々木投手のお菓子持参のチェコ選手へのお詫びや大谷選手のホームランボールを周りの人へ写真を撮るために貸してあげていた大学生など、「日本人の礼節のすばらしさ」が世界中で話題である。これらは、今回のWBCだけでなく、以前掲載したサッカー日本代表の控室のそうじやイチローさんの野球道具を大切に扱うことなども度々取り上げられていた。これら日本人の礼節は、幼児期からの日本の教育で育成されているとメディアによく言われている。「物を大切に」「来た時よりも美しく」「幸せは分かち合う」「人に悪いことをしなかつた」と思っただけは詫言「これらは、私たちがからした当たり前前のことであるが、そのような教育を受けていない所(国)では「善行」となるのかもしれない。このようなことをメディアで取り上げられる度に、日本人としての誇らしさと日本型教育の正しさを実感でき、明るい気持ちになった。これからも日本教育の当たり前をやっつけていきたい。

みんなちがって みんないい～（その13）

～共生社会をめざして～

今年度最後の掲載となります。今回は、私が経験した「知的障害特別支援学級」及び「自閉症・情緒障害特別支援学級」で学んだことをお伝えします。

「知的障害特別支援学級」には、理解力・判断力・記憶力などに遅れがあり、通常学級で学習することが困難だと考えられる子供たちが、そして、「自閉症・情緒障害特別支援学級」には、自閉症スペクトラム症（※1）・場面緘黙症（※2）・ADHD（※3）などの障がいをもつ子供たちが在籍しています。「情緒障害」とは、感情の起伏が激しい、情緒の表れ方が偏っている、感情の表現が激しいなどの症状が、本人の意志では抑制できない状態であり、コミュニケーションがとりづらい障がいです。また、現在「視覚障害特別支援学級」など7種の特別支援学級がありますが、それぞれの学級に在籍している子供たちの中にも、理解力に遅れがあり、情緒の表れ方に偏りがある児童が在籍しています。

以前「知的障害特別支援学級」の担任として、1年間経験しました。在籍していたのは、3年生の男子1名でした。朝から窓の外を眺め、季節の移り変わりを言葉にできる、感性が豊かな子供でした。その一方、文章の内容を理解したり、公式や計算の仕方などを記憶したりすることが苦手でした。国語科や算数科、自立活動の時間を中心に、語彙を増やし、言葉や文章の意味を理解することができることを1年間の長期目標に設定し、指導・支援を行いました。言葉の意味を文で理解することが苦手だったので、写真やイラストとその意味を表す言葉をカードにして、絵合わせゲームを行いました。1年間繰り返しました。その結果、1年間で40語くらいの意味を理解することができました。しかし、長期記憶力が困難であったため、言葉の意味を表現したり、算数で用いる用語（例えば「長方形」など）を覚えたりすることは難しいことでした。ただ、それらの用語を画用紙に書き、壁に貼るなどの支援を行うことで、問題を解くことができるようになりました。個に応じた支援の大切さを強く実感することができた1年間でした。

「自閉症・情緒障害特別支援学級」の担任が一番長く、5年間で5名の子供たちを受け持ちました。この5名は、自閉スペクトラム症及びADHDを合わせもつ子供、もしくは、そのどちらかの障がいと診断された子供でした。この中には、情緒面が不安定なため、パニックを起こす子供もいました。そのような中、こんなことがありました。

一人の子供が、交流学級での小集団の学習の中で、友達に「今日は、〇〇さんと一緒に学習するから、明日一緒に学習しようね。」というようなことを言われました。ほとんどの子供は、その真意を理解し、情緒を乱すことはないと思います。しかし、その子は、前半の「今日は、〇〇さんと一緒に」を強く意識してしまったため、自分がその友達に拒絶された

と勘違いしてしまったのです。そのことを私にも上手く伝えることができず、結局次の日は学校に登校することができませんでした。このような場合、状況を正確に判断し、そのことを子供と保護者に伝え、時間がかかっても無理強いをせず、本人が納得するまで待つことが大切です。その子の場合、安定するのに時間がかかりましたが、4日目からは元気に登校し、友達とも良好な関係に戻ることができました。

自閉症・情緒障害特別支援学級の児童にとって、大切なことは、情緒面が安定するための支援と指導です。情緒面が乱れた際の対応だけでなく、情緒が乱れないような、接し方や言葉の掛け方、環境面などを考えていくことは重要な支援となります。また、相手の気持ちを考えさせ、理解させるような指導も必要です。

また、ある子供は、特定の事柄に執着してしまうため、学習することが困難になることがありました。その子の場合、学習に関係があるイラストや写真などを見せてから、授業を始めるようにすると、本時の学習内容に意識を変えることが容易に行うことができました。ちなみに、言葉で伝えるだけでは、学習に向かわせることにほとんど失敗しました。

これまで述べてきたように、4種類の学級で8名の児童と関わりながら、私自身多くのことを学ぶことができました。その中で、特に大切だと思うことは、子供を客観的に見て、できるだけ正確に実態（得意なこと、苦手なこと、社会に自立するために必要なことなど）を把握することです。そのような観点は、定型発達をしている子供たちにとっても大切なことです。一人一人の子供を正確に見て、良い言動は褒め、課題については、試行錯誤しながら、共に解決に向けて取り組んでいくことができれば、子供たちも安心して生活することができ、それぞれに成長していきます。

1年間「特別支援教育」に関する内容を発信させていただき「みんなちがって、みんないい」といった学校や社会にしていくためには、その人の特性や困っている理由について理解することから始まります。保護者や地域の方に御理解いただき、鳴鼓小が「みんなちがって、みんないい」学校になるよう、これからも職員一同 尽力していきます。

1年間ありがとうございました。

- ※1 主に社会的なコミュニケーションの困難さや空間・人・特定の行動に対する強いこだわりがある状態。
- ※2 家庭などのある場面や状況で話すことができるにもかかわらず、特定の社会的状況や場面において、話すことが一貫してできない状態。
- ※3 発達水準からみて不相应に注意を持続させることが困難であったり、順序立てて行動することが苦手であったり、落ち着きがない、待てない、行動の抑制が困難であるなどといった特徴が持続的に認められ、そのために日常生活に困難が起こっている状態。

（文責 特別支援C o. 山下 健一）